

## フランス・ルネサンスの想像界 (I)

——ピエール・ド・レトワルの『日記』を読む——

伊 藤 進

### 序論——驚異の存在

同じく、この1429年6月6日、オベルヴィリエで、この図〔草稿ではここにシャム双生児の素描が添えられてあった〕にあるのと違わぬ二人の子どもが生まれた。というのも本当に私は彼女らを見、自分の手で抱いたからだ、彼女らは二つの頭、四本の腕、二つの首、四本の脚、四本の足を持っていながら、腹はひとつしかなく臍もひとつしかなく、二つの頭と二つの背中を持っていた。彼女らは洗礼を授けられ、三日間だけ生存して、パリの住民にこの大きな驚異をまざまざと見せつけた。実際のところ、男女を問わず、一万人を超えるパリの住民が見にやって来たのだが、われらが主のお恵みによりその母親はつつがなく出産できた。彼女らは午前七時頃に生まれ、サン＝クリストフ小教区で洗礼を授けられ、右側の子がアニェス、左側の子がジャンヌと名づけられ、父親はジャン・ディスクレ、母親はジレットといった。彼女らは受洗後一時間生きていた。

同じく、これと同じ週の、次の日曜日に、サン＝ジャン教会裏のシャンヴルリー通りで、二つの頭、八本の足、二本の尻尾を持った仔牛が生まれた。翌週には、サン＝トゥスタッシュ街区で、二つの頭を持った仔豚が生まれたが、しかし足は四本だけだった。

あるいは、

同じく〔1515年〕、9月のこの聖女ブリジッドの祝日の二、三日前に、フランドルはアントウェルペン市およびメクリン市の上空に、焰となって燃える赤い巨大なドラゴンの形をした大きな彗星が見られたが、それは一、二日にわたって空にあった。そしてついには、いくつもの断片に分裂して、海に落ちていった。人の噂では、これが聖十字の祝日の徴〔マリニャーノの戦勝〕を予示していた。

この1519年〔新暦の1520年〕、復活祭前の、3月16日金曜日午後六時か七時頃に、パリ及びその周辺遠くまで、ほとんどフランス全土で、凄まじい驚くべき風が吹き荒れて、パリでは家屋に大きな被害をいくつももたらし、何本もの煙突を倒壊させたりなどした。畑や森では、木々が根こぎされて、たくさん吹き倒された。それがもとで、三、四年以上たつと、材木は以前よりもっと手頃な値段になった。樽では、以前は材木はうんと高値でなかなか入手できなかったもので、それは神が哀れな民を救い助けるために送り届けてくださった一手段だったと。

これら三箇所の引用のうち、最初のものが所謂怪物・畸形の誕生譚であり、後者の二つは天変地異の類に属する記事である。いずれも、現代の科学文明の恩恵に与かって生きている私たちにとって、なるほど驚くべき話ではあっても、どこか苦笑せざるをえないような内容でもあろう。ところでこれらはいずれも15世紀前葉および16世紀前葉に書かれた日記から引用したものである<sup>(1)</sup>。人間や動物の畸形はシャム双生児だったり、突然変異的な異形だったりすることもあるだろうし、長い尾を引く彗星が夜空に赤い火花を散らしながら流れていくこともあるだろうし、暴風雨が甚大な被害を及ぼすこともあるだろう。合理的な思考に慣れた私たちに珍しくはあっても、とりたてて騒ぎたてるほどのことでもないのに、なぜ15・16世紀のフランス人はこれをわざわざ日記に書き留めなければならなかったのだろうか。異常な事象、作者の心を打つ出来事だったからこそ書き留めずにはおかなかったのに違いない。しかもこの種の記事が当時の日記には事欠かないのだ。上に掲げた引用が特殊だったわけでは決してない。

そこでもう一度、引用文を読み直してほしい。そこには共通した特徴が見えてこないか。少なくとも後者の例にそれを読み取ることができるだろう。彗星の出現はフランソワ一世のマリニャーノでの輝かしい勝利の「予

(1) 前者は『シャルル六世・シャルル七世治下におけるパリ一市民の日記』からの (*Journal d'un bourgeois de Paris de 1405 à 1449*, éd. C. Beaune, Paris, Le Livre de Poche, 1990, pp. 259-260), 後者の二例は『フランソワ一世治下におけるパリ一市民の日記』からの (*Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François premier (1515-1536)*, éd. L. Lalanne, Paris, J. Renouard, 1854, pp. 26 et 81-82) 引用である。

兆」であり、暴風は神の恵みの「徴」なのだ。つまり、驚異の現象に何らかの前兆・徴を結びつけねばすまない、当時の人々の心性である。これをして日記作者にこの記事を記録せしめたのである。それにひきかえ前者の例ではなるほどそれを明示するものはない。だが、「同じく、このころ、サン＝トノレ門にて、橋の下の水の中に、もうすこし赤みは薄いけれどまるで血のような湧水が見られた。日曜日にあたる聖ピエールと聖ポールの祝日に見つけられてから、つづく水曜日まで湧水は続いた。見に行った人々はたいそう驚きいり、なにせあんまりたくさんの人たちが見に行ったものだから、しかるべく市門は閉じられ、橋は二日間揚げられるほどだったが、この湧水が何を意味するのか、誰にも知ることはできなかった」<sup>(2)</sup>と書き記す逸名の日記作者である。そんな人物が畸形の誕生になんの徴も嗅ぎとらなかつたはずがないではないか。この日記の最新版を編んだコレット・ボヌーがいみじくも指摘しているとおりでである、「日記作者はなぜこんな人間と動物の畸形の話をするのか。この自然の乱れは社会的政治的な変調、具体的に言えば、彼の党派〔ブルゴーニュ派〕にとっての惨事（そこでこうした怪物の出現が起こる）を予示している、と信じているのだ」<sup>(3)</sup>。したがってこれらの引用すべてに共通して言えることは、驚異の現象に何らかの徴を認めるといふ当時の人たちの心性が浮き彫りにされていることであり、それは決して荒唐無稽な戯言ではなかつたということである。

ヨーロッパ中世は勿論、近代における社会というものは、実際の人間の行動やら事績といった物質的・実体的現実から成り立つのみならず、数々の夢や幻想や妄想といった想像の領域からも同様に成り立っている。人間は単に物質的環境を生きるだけでなく、日常的な思考や行為に想像力を反映させながら生きているはずだから。想像の領野と現実とは絶えず相互に影響を及ぼしあう。夢見ずに、妄想に憑かれないうで人間が生きてきたなんて、いったい考えられるだろうか。まさしく、「想像力によって、想像力のなかで、そして想像力から、人間は生存の大半を過ごしてきた」<sup>(4)</sup>と言えるの

(2) *Ed. cit.*, p. 170（強調筆者。以下同じ）。

(3) *Ibid.*, p. 260, n. 117.

(4) ジャック・ルゴフ『中世の夢』、池上俊一訳、名古屋大学出版会、1992、iii頁。

だ。コロンブスは東方の夢に駆り立てられたのでなかったか、陶工パリシーやジャン・ド・レリーらは迫害されたプロテスタントのための楽園の幻想に<sup>(5)</sup>、エラスムスはユマニスム的キリスト教世界の夢に、トマス・ミュンツァーは千年王国の夢に憑かれたのではなかったか……。物質的現実だけに目を奪われるのではなく、想像界の意味や変容にも想いを凝らすべきなのだ。想像界の復権。

その想像界のひとつのカテゴリーに驚異がある<sup>(6)</sup>。それは、前掲した日記の記事が示唆していたように、中世人はおろか、ルネサンス人の想像力に跋扈して、彼らの精神に瀰漫してやまないものであった。いや、ルイ十三世の治世初期を経験したピエール・ド・レトワルまでもが同様だったと言ってよい。彼の膨大な日記<sup>(7)</sup>を繙けば、否応なくそのことを思い知らされるはずである。もっとも彼の場合には、おいおい明らかになるはずだが、先人たちと異なる精神の働きというか、意識のずれも看取できるだろう。その意味では、レトワルは近代人の変容しつつある精神の兆しを窺わせる、またとないモデルになりうるのではないか。本稿では、16世紀人の集団心性を垣間見せる、このレトワルの情報豊かな日記をとば口として、近代の想像界の骨格をなす驚異の領野（怪物・天変地異・奇蹟など）のイメージ群を、換言すれば、当時の人々が思い描いたままの驚異現象ないし人々の心と精神のなかにのみ存在した驚異を考察していきたい。

(5) 拙論「共同体幻想としての庭園」、『文化科学研究』（中京大学文化科学研究所）、Vol. 4, No. 1, 1992, 1-12頁。

(6) ジャック・ルゴフ、前掲書、4頁。

(7) 正確に言えば、「記録簿＝日記」(registres-journaux)である。これは一種の家事日誌(livres de raison)ともいうべきもので、家長が家の経済状況を日毎に検証する出納簿のようなものである。ただ、そこには日常生活や政治生活、宗教生活の主だった出来事をも書き留めた。このため、表題を回想録とつけるべきか、年代記か、あるいは記録簿＝日記とつけるべきか、書き手は逡巡することになる(cf. M. Lazard, «Les bourgeois juges de la cour», in *La cour au miroir des mémorialistes 1530-1682*, sous la dir. de N. Hepp, Paris, Klincksieck, 1991, p. 43)。本稿では便宜上、ただ単に「日記」と表記することとする。

## I 怪物の夢想

### 1 見世物としての畸形

昨今ではめったに見受けないが、昔はよく縁日か、なにかの祭のときになると、粗末な小屋を建てて、なにやら怪しげな見世物が張られることがあった。小屋に掲げられた、けばけばしい色彩で蛇女やら侏儒やら毛むくじゃらの女が描かれた看板を横目で見やりながら、好奇心に心動かされることはあっても言い知れぬ怖じ気につかれて、客寄せの口上にもかかわらず結局中へ入れなかった記憶がある。そのときに、見世物にかけられているフリークスなんていんちきだよ、とおとなから諭されて、妙に納得したような気になったものだ。

ところで、こうしたフリーク・ショーは17・18世紀のロンドンで大盛況だったのである。ロンドン市民は言わずもがな、地方からのお上りさんまで、身分の高い人と烏合の衆、教養ある人と無知の輩が一緒になって、煽情的なもの、神秘的なもの、グロテスクなものへの好奇心から、新たな驚異が見世物にかけられるとなると、どっと小屋に殺到して見物したという。見世物にされた畸形でとくに多かったのは、興味深いロンドンの見世物の歴史を著したオールティックによれば、「巨人、巨児、大男、侏儒、並べて展示された巨人と侏儒、男女、手足なし人間、怪鳥、異形、病的異形などの見世物」とか、一風変わった芸をする者たち、つまり「洗面屋、怪力人間、火食い他、猫などの生肉食い、石食い、勘定少年」などであった<sup>(1)</sup>。そしてごたぶんに漏れず、自分には「不思議なものならもうなんでもかんでも見たがる虫がいる」<sup>(2)</sup>と書いたサミュエル・ピープスは律儀にこうしたショーに通ったのだった。

ところかわってフランスでは、17世紀はいざ知らず、16世紀では畸形が

---

(1) R. D. オールティック『ロンドンの見世物』（I）、小池滋監訳、国書刊行会、1989、117頁。ロンドンでのフリーク・ショーについては、すべて同書に負っている。また、レスリー・フィードラー『フリークス——秘められた自己の神話とイメージ』、伊藤・旦・大場訳、青土社、1990も参照。

(2) オールティック、前掲書、119頁。

見世物に晒されることはまだまだ少なかった。好奇半分、怖さ半分で畸形を見にくることはあっても——先に引いた 15 世紀の日記作者の記事にあった、シャム双生児誕生を確かめにくるパリの人たちがこの例であろう——、娯楽気分で木戸銭を払ってまで見物することは稀だったようだ。そんななかで、なかなか興味をそそる記述をピエール・ド・レトワルの日記に見ることができる。

[1586 年 2 月] 10 日、腕がなくても、書いたり、コップを洗ったり、帽子を取ったり、九柱戯やカルタや骰子遊びをしたり、弓を引き絞ったり、荷物を馬から下ろしたり積んだり、包帯したり、銃を放ったりする男に出会った。彼は自称ブルターニュはナントの生まれで、四十歳かそこいらの年齢だった (II, pp. 326-327)<sup>(3)</sup>。

これだけでは、レトワルがパリ市中でたまたま両腕のない器用な男と会ったという凶しか浮かびあがってこないが、どうもこの男は己の不具を種に、ということは己を見世物に供して、食扶持を得ていたらしいのだ。同一人物に言及しているモンテーニュの記述 (『エッセー』第 1 巻第 23 章) がそのことを教えてくれる。

私は家でつい最近、ナント生れの、生れつき手のない小男を見たが、彼は手がなすべきことを足にさせるように上手に仕込んだものだから、足は実際に本来の仕事を半ば忘れていたほどだった。つまり、彼は足を自分の手と呼んで、それでもって肉も刻むし、銃に装填し発射もする。針に糸を通し、縫い、書き、帽子を脱ぎ、髪を梳き、カルタや骰子遊びをし、それをほかの人と同じに巧みにあやつる。私が金を与えると (彼は自分を見世物にして生計を立てていたから)、われわれが手でやるように足で受け取った<sup>(4)</sup>。

(3) *Mémoires-Journaux de Pierre de L'Estoile*, éd. G. Brunet et alii, 12 vol., Paris, Librairie des Bibliophiles, 1875-1888. 以下、特記しない限り引用はすべてこの版本によるものとし、引用のあとに該当する巻数と頁数のみを記す。

(4) Montaigne, *Essais*, éd. P. Villey et V.-L. Saulnier, Paris, PUF, 1965, p. 111 (モンテーニュ『エッセー』(I), 原二郎訳, 筑摩書房, 1962, 78-79 頁). なおレトワルが会った男とモンテーニュが見た人物の同定については、voir *Journal de L'Estoile pour le règne de Henri III*, éd. L.-R. Lefèvre, Paris, Gallimard, 1943, p. 729, n. 462bis. モンテーニュは同書第 2 巻第 30 章でも、畸形児を見世物にして金を稼ぐその子の父親と叔父・叔母に言及している。

17世紀のロンドンと違って、まさか小屋掛けで自分の畸形を見物させるわけにいかないのだから、自らを見世物にするこの不具者は路上で芸を披露したであろうし、モンテーニュが記すように個人の家を巡っては自分を売り込んだりしたのだろう。しかし一人だけの見世物では客を得にくいとみえて、ときには数人と組んで——ただそのとき自分と同じ畸形である必要はなく、見物客を集めるだけの芸（たとえば役者）があればよかった——見世物になることもあったらしい。サン＝メクサンの国王弁護士ミシェル・ル・リシュの日記に記録されている小男の場合がそうであるが、おそらく同一人物が話題になっているのだろう。

〔1579年3月〕17日土曜日、両腕がなく、足をその代わりに使いこなす、自称ナント出身の小男が当市にやって来た。装填した銃を発射したり、包帯をしたり、犬を打ち倒したり、骰子遊びをし、自分の身体を洗って、拭いたりした。パンを切って、コップを洗い、コップに葡萄酒や水を注ぎ、カルタをし、帽子を脱いで人々に挨拶をし、針に糸を通し、結び目を作り、走り、とても上手に書いたりしたが、これらを全部足でしたのだ。私はこれを彼が宿泊している「白鳥」亭で見た。六人が彼と一緒にいて、そのうち二人が女で、彼らは笑劇を演じていた<sup>(5)</sup>。

これら三つの記述にあるナント男が同一の人物であるならば、サン＝メクサン（ポワトゥー地方）やらボルドー / モンテーニュ（ギューエンヌ地方）やらパリやらとフランス各地を転々と巡っては、我身を見世物に晒してきたことになる。そしてそれなりの見物客を集めていたのだろう。

レトワル、モンテーニュ、ル・リシュがいずれも異形になみなみならぬ関心を寄せていたことだけはこれで推測されるのだが、ではこうした畸形ないし怪物に興味を抱いたのは彼ら一部の人たちだけのことだったのか、またその好奇は奈辺から来るのか、あるいはそもそも16世紀フランスの人々は怪異なものにどのような反応を示し、怪物の誕生をどう受け止めたのか、そうした問題を次節以下で考えてみたい。

(5) *Journal de Guillaume et de Michel Le Riche*, éd. A.-D. de La Fontenelle de Vaudoré, Genève, Slatkine Reprints, 1971 (1846), pp. 308-309.

## 2 畸形の神話

ここで扱う畸形ないし怪物とは、まず有機的存在であり、その構造がその種の個体の構造と著しく異なっているものである。それには、過剰による異常な個体（指の数とか頭が余分についているような場合）、欠如による異常（一本足の人間——有名なところでは影足族<sup>スキアポデス</sup>、あるいは腕や鼻など、あるべきものが欠如している場合）、混種による異常（両性具有者、狗頭人間<sup>キュノケパロイ</sup>、メリュジューヌ、神話上のサテュロスなど）、部位の逸脱した位置による異常（足が前後逆についた人間——対蹠人<sup>アンティポデス</sup>）などが考えられるが<sup>(6)</sup>、ともあれ形態的にはなほだしい異常性を呈する人間ないし動物（個人も種族も含めて）と規定していいだろう。

奇怪な怪物に対する驚きはホメロス、ヘロドトス、クニドスのクテシアス、プリニウスといった古代の人々がすでに見せているところであり、その存在は人間の存在と同じくらいに古いと言えるかもしれない。怪物のカタログとなると、ソリヌス、セビリャのインドルス、トマ・ド・カンタンプレ、ヴァンサン・ド・ボーヴェといった百科全書の伝統をくむ人たち、マルコ・ポーロやマンデヴィルといった中世の旅行家（ただし後者が著したのは架空旅行記）によって絶えず確認されてきたし、近代にはいってもリュコステネス、ポリドロ・ウェルギリオなどが新たな博物学の体系に組みこんでいくだろうし、ブリューゲルやボッスや『パンタグリユエル滑稽夢』（1565）のフランソワ・デプレのように図像化する者もでてくるのだ。勿論怪物の系譜をたどることが問題なのではない<sup>(7)</sup>。しかしながらレトワールを初めとする近代人が怪異を前にしたときの心のありようを推察する際

(6) 怪物の類型学については、C. Kappler, *Monstres, démons et merveilles à la fin du Moyen Age*, Paris, Payot, 1980, pp. 115-183 を参照するとよい。古典古代から16世紀にいたる、より広大なパースペクティヴで、ヨーロッパが東洋について抱いた幻想を刺戟的に論述した、彌永信美『幻想の東洋——オリエンタリズムの系譜』、青土社、1987、44-48頁にも簡単ながら言及されている。

(7) 怪物の系譜をたどるには、次の二著が有益である。C. Lecouteux, *Les Monstres dans la pensée médiévale européenne*, Paris, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 1993; J. Baltrušaitis, *Réveils et prodiges. Le Gothique fantastique*, Paris, A. Colin, 1960.



に、一体に西洋の知が怪物の存在に驚嘆と危惧の言葉を連綿と綴ってきたことだけは知るべきなのだ。

では、その怪物の存在はどのように説明されてきたのか。驚異の問題についてまさに画期的な研究を著したジャン・セアールを手引にしながら、これを一瞥しておくのもあながち無駄ではない<sup>(8)</sup>。

そもそもの始まりから、怪物に関する考察は三つの異なった方向に向かっていった。まず、アリストテレスによれば、怪物はなんのショックを与えたり畏怖させたりするものでなく、偶発的に造り出されたもので、彼は怪物誕生の原因と分類を自然科学的観点から試みようとした。畸形は造化の戯れ、自然の悪戯で、何ら恐れるに足らず、というわけだ。他方、キケロは怪物に予言的な徴を認めた。怪物は神が人間に呼びかけてくる驚異のひとつであり、それは神から人間への警告、助言、威嚇のメッセージだとする。しかるに、この怪物が予言の記号だとするキケロの意見を斥けたのはアウグスティヌスである。「天と地と海の多種多様な美しさ、太陽と月と星の光の豊かさとおどろくべき美しさ、樹々の陰、花の色と香、さまざまな、そして多くの鳥とその歌声や光る翼、形や大きさにおいて数えきれない動物、そのなかのもっとも小さなものでさえ、わたしたちの大きな驚嘆をひきおこす（というのも、わたしたちは鯨の大きな体よりも蟻や蜂の働きによりおどろかされるからである）。また、ときには緑と多様な色の変化、ときには紫、ときには碧といった、いわば異なった衣服のように色を変える海の壮大な光景」<sup>(9)</sup>。こうした万物の調和した美しさを配して、私たち人間に絶えず賛嘆を目覚めさせようとする、芸術家たる神の力、怪物はこれをまさに証すものであり、怪物の存在は神の意図された結果なのである。異形は神の似姿として創られた人間に己自身の美しさを意識させるのに一役買うことになる。これはもう啓示ともいうべきで、神の意志とはこのように当然ながら人知を超えるものなのである。「わたしたちのあいだに奇怪な人間が生れることについては、(……) 何らかの奇怪な氏族につい

(8) J. Céard, *La Nature et les Prodiges. L'insolite au XVI<sup>e</sup> siècle en France*, Genève, Droz, 1977, pp. 3-84.

(9) アウグスティヌス『神の国』(五), 服部英二郎・藤本雄三訳, 岩波文庫, 1991, 463頁。

でも与えられるのである。すなわち、神は万物の創造者であられるのであるが、どこで、いつ、何がつくられるべきであるか、また、つくられるべきであったか、御自身が知っておられるのである。神は全体の美を、その諸部分について類似性と差異性によって織り合わせる知恵をもっておられるかたである。けれども、総体を見渡すことのできない者は、いわば部分の醜さとして見られるものによって感情を害されるのであって、それというのも、かれは、その部分が何に適合しているのか、またどのように関係づけられているのか、無知だからである」<sup>(10)</sup>。人間のあずかりしらぬ意志でもって、創造者たる神は諸部分を配置するのだ。だから、生まれつき手や足の指の数が多い人間がいたとしても、「標準からの大きな逸脱が現れるとしても、神は御自身のなさることを知っておられるのであって、だれもその御業をとがめる権利をもってはいないのである」<sup>(11)</sup>。これらのテキストから、アウグスティヌスは怪物を予言から免れさせたこと——ということとはとりもなおさず、怪物はもう混乱を意味せず、贖罪を要する無秩序でないということ、奇怪な氏族にキリスト者の注意を喚起するような、ある種の尊厳を付与していること、この二点が確認されるであろう。そうして導き出された結論は、「個々の種族のうちにある種の奇怪な人間が存在するように、人類全体のうちにある種の奇怪な種族が存在するとしても、わたしたちはそれを不合理なことと見てはならない」<sup>(12)</sup>、というものだった。また、天に驚くべき前兆が現れたとして、「ウェヌスの星」が色や大きさ、形や進路を変えたことを記したマルクス・ワルロを引例しながら、アウグスティヌスは前兆は本性に全然反したものでないとも断じる。「かくも偉大な創造者の意志がすべてのつくられたものの本性であるからには、神の意志によっておこるとき、いかにして自然本性に反しうるであろうか。それゆえ、前兆は本性に反しておこるのではなく、本性として知られているところのものに反しておこるのである」<sup>(13)</sup>。神は星の形や色、運行の秩序・法則を望めば変えることだってできるのだ。かくて、怪物は自然

(10) 同書(四), 1986, 149頁。

(11) 同上。

(12) 同上, 151頁。

(13) 同書(五), 289頁。

に反していないし、それに何らかの前兆とか予言をいたずらに読み取るべきではないのである。

アウグスティヌスの影響を受けながらも、この先人の思想を貧しいものにしてしまったのがセビリャのイシドルスである。キケロのいう予言に愛着を覚えるイシドルスは、「前兆」は神が送ってくる徴であり、来るべき何らかの不幸を人間に知らせるために当てられているとする。彼によれば、将来の災厄を知らせる徴としての怪物はその恰好・姿でその災厄のなんたるかを意味するようになる。つまり怪物とそれが予示する出来事の間には一種のアナロジーの関係が存在し、前者（怪物）を検討することで後者（出来事）を予感することが可能となるのだ。したがって怪物の形態が将来の出来事を否応なく明示するわけだから、自ずと怪物を叙述するように心がけられることになるだろう。

次第に怪物は将来の出来事の単なる徴ではなくなり、その出来事を通じて罰せられるであろう人間の罪を告発する意味合いを帯びてくる。古典古代の怪物と違って、キリスト教時代の怪物は場合に応じて幸福な出来事とか不幸な出来事を示すということがもうできなくなって、ほとんどいつも災いの徴となるのだ。

やがて、怪物は自然を逸脱した驚異（*prodiges*）のひとつに属し、しかもそのなかで最も目立ったものとなって、怪物の誕生だけが脅威と懲罰の徴候として唯一の関心事になるだろう。したがって怪物の恰好の細部はもうどうでもよい。畏敬の混じった恐怖心をいやまし、悔悛して神のもとに帰りたいという気持を抱かせるためにのみ、怪物の異常性の叙述が利用される。数ある驚異のなかでもとりわけ怪物に人間の注意を引き寄せるに足る重みを認めるのである。興味深い事例をひとつだけ挙げよう。ボッカッチョの『デカメロン』の流れをひく『笑話集』（1438-1452）の中に、ポッジョ・ブラッチョリーニが、その仏語訳者ギヨーム・タルディフの言による「本書が書かれた時期に地上に現れた怪物および摩訶不思議な驚異」<sup>(14)</sup>

(14) *Les Facécies de Poge, Florentin, traitant de plusieurs nouvelles choses morales*. Traduction française de Guillaume Tardif, du Puy-en-Velay, Lecteur du Roi Charles VIII, éd. par A. de Montaiglon, Paris, Léon Willem, 1878, p. 68.

を扱った四篇の小話を挿入していることだ。最初のは、牝牛が大きな蛇（というよりもむしろドラゴン）を産んだ話で、それを目撃した人々によれば、その頭は仔牛よりも大きく、首は驢馬のように長く、体つきはもっと長いことを除けば犬のようになっていた。牝牛が蛇を産み落として、これを見るや、怖じ気づいて一声啼いて逃げだそうとした。すると、そうはさせじとばかりに蛇はむくっと起き上がり、尾を牝牛の後脚に巻きつけて動けなくさせてしまった。そして牝牛の乳房に食いつくと、ちゅうちゅうと乳を吸ってから、近くの森に逃げこんだ。牝牛の腿と乳房は蛇に触れられて、まるで焼け焦げたように真っ黒になっていた。二つめの話は双頭の猫の誕生譚、三つめは、双頭で八本足の仔牛が生まれた話、最後のは、臍から上は人間、下半身は魚という海の怪物——肌着を海辺に洗いにくる若い娘をことのほか好んで食った——の出現した話である<sup>(15)</sup>。ポッジョが愉快な小話の中にこうした「驚倒すべき物語」を挿入したのは、タルディフ自身が言うには、「私たちのこよなき幸せと俗界の悦楽に、われらが寛大な救世主にして贖主イエス・キリストの御業の記憶を是非とも植えつけなければならぬからであり、それらの御業は、怪異なるくさぐさが自然のなかにあるごとく、私たちの判断力をもってしては驚くべき感嘆すべきものである」<sup>(16)</sup> からだ。つまりそれらは、笑いのさなかにあっても読者の魂の目を創造主に向けさせるはずの、タルディフの言葉を再び借りれば、「瞑想に誘うくさぐさ」<sup>(17)</sup> なのである。それらは読者に神のことを語ってきかせているのだから。

16世紀にはいっても驚異現象は貪欲に求めつづけられる。16世紀人は神が奇蹟をとおして顕現すると信じて疑わない。あまたの驚異に織りなされた自然のなかで、奇蹟こそが神のいっそう直截的な表現なのである。自然のなかに夥しい明白な徴を読み取る人間に、自然はまずもって賛嘆の念を呼びさますだろう。とはいえ、『ニュルンベルク年代記』の名で知られるハルトマン・シェーデルの年代記（1493）がすでに示唆するように、一抹

(15) 順に, contes XXII-XXV, *ibid.*, pp. 68-77.

(16) *Ibid.*, pp. 76-77.

(17) *Ibid.*, p. 69 ( «choses méditatives» ).

の不安が賛嘆に混じっていないわけではない。16世紀初頭の年代記には驚異が横溢し、怪物は不吉な出来事を告げる徴と解釈されて、増殖を続け、人々に恐怖の種をふりまきながら、神が人間に与えてやまない警告の痕跡をそこに読み取るように向かわせたのだった。このころに驚異現象の集成が多数出版され、人間に恐怖をひきおこす事象はことごとく神慮に連関づけられていく。また同一の驚異がいくつもの意味を担うこともありえるようになる。たとえば、ルターとメランヒトンが『驚倒すべき二体の怪物について』という小冊子を1523年に上梓したことは周知のとおりである。それは、メランヒトンが1496年にローマ市中を流れるテーヴェレ河岸で発見された怪物「<sup>パプストエーゼル</sup>教皇驢馬」の解釈に、ルターが1522年にザクセンのマイセン辺境伯領フライベルクで誕生した怪物「<sup>メンスカルプ</sup>坊主仔牛」の意味を見出すことにそれぞれ専念した結実だった。彼らはバルトルシャイティスが言うような、これらの怪物を創造したのでは決してない<sup>(18)</sup>。これらの怪物の存在を日常的現実であると信じているのだ。彼らは怪物を神の怒りの確かな徴と見なして、そこに神の意志を読み、それぞれの怪物が有する固有の意味作用を把握することが可能だと解釈するのみならず、怪物一般および驚異現象一般を救済史に関連する、もっといえば終末論に連動する変動の徴と解釈しているのだ。

繰り返すまでもなく、当時こうした怪物の存在を信じたのはなにもルターやメランヒトンに限らない。大部分の人はその存在を信じて疑わなかった。最後に、ルターが採り上げた「坊主仔牛」誕生のニュースをかなり詳しく書き留めた逸名の日記作者の文面を見てみよう。

1522年12月12日、ザクセン国はマイセン地方のフライベルクという町で、たまたま肉屋が死んだ牝牛をさばっていたところ、腹の中に怪物がいるのを発見した。その姿は〔絵に〕描かれて、爾来いまでは町じゅうでおおっぴらに売ら

(18) Voir J. Baltrušaitis, *op. cit.*, p. 313. 因みに、本稿の最大の関心事であるピエール・ド・レトワルはいかにも「怪物の最大の愛好家」(ジャン・セアールの表現。Voir A. Paré, *Des Monstres et prodiges*, éd. J. Céard, Genève, Droz, 1971, p. XXII) らしく、ルターとメランヒトンの小冊子(1557年版)を所有している。ただし留意すべきは、この著書をレトワル自身は「愉快的滑稽話」«plaisante drollerie» と評していることである。Voir IX, p. 215.

れている。怪物はおとなの畸形の頭をしており、頭上に大きな剃冠をいただき、白味がかっていて、雄牛の恰好をした胴体のほかの部分には豚の形に似ていた。皮膚の色は赤味がかった、暗い褐色で、豚の尻尾をしており、二重になった皮膚で頭巾のようになっていて、頸の肉とつながっている。その死骸は乾燥させてから、アンリ・ド・サクソニア某の家に三日間保管された。それから彼はザクセン公フリードリヒ殿にそれを送ったので、現在もそこにあって、毎日見ることが出来る。

そのときに作られたバラッド

ルターが人間の恰好をして  
 アウグスチノ会の信仰を奉じたときは、  
 その容貌も腐っていなかった、  
 その横柄さで穢してしまっただが。  
 この怪物が全人類に告げているからだ、  
 近づきにくく、奇矯な人となりを。  
 彼は悪徳で我身を泥まみれにしたから。  
 こんな怪物はくだらぬと考える人たちは  
 物知りで、賢明、博学の、  
 石よりも頑として動じぬザクセン人だ。  
 連中は昔犯した罪を捨てはしないだろう。  
 高潔な裁き手の御手を感じとるまでは<sup>(19)</sup>。

日記作者のパリの一市民は怪物に神の徴を見ているか、単なる物珍しさを見ているのか、何も語っていないけれども、これに先立つ記事で、マルティン・ルターという、ドイツの「異端の神学博士」がザクセン公国で立ち上がり、教皇権力と教会の儀式に異議を唱える多数の書物を著して、ドイツの各都市およびフランス全土で印刷刊行されていること、これを知った、時の教皇レオ十世の逆鱗にふれ、ルターが破門されたことを記している<sup>(20)</sup>。そして前掲の記述に見るように、怪物の報告のすぐあとに、「坊主仔牛」はルターの墮落を神が告発したものと見なされる、とうたったバラッドが続いて引用されている。こうしたことから、日記作者は怪物に神の懲

(19) *Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François premier, op. cit.*, pp. 95-96.

(20) *Ibid.*, pp. 94-95.

罰を見ていると考えるべきであろう。少なくとも、今まで疑問も抱かずにローマ・カトリック教会の教えを精神的支柱として生きてきた市民は、ルターと「坊主仔牛」の出現に、精神界の大変動の予感だけでなく、なにかしらアポカリプス的な記号と恐怖を嗅ぎとっているように思われる。

### 3 畸形の二面性

ユマニズムも宗教改革自体も、したがって、中世の想像力にとりついた驚異と幻想性の感覚や怪物への嗜好を枯渇させるどころか、むしろこれらへの新たな好奇心と知識を蘇らせたのである。宗教改革者についてはルターとメランヒトンの場合で見たとおりだが、ユマニストたちについては言えば、自然現象や経験上のデータに留意して新しい科学の基礎を据えようとしたからといって、ユマニストが奇怪な出来事や畸形に夢中にならなかったわけではない。あの博学のユマニスト、ジャン・ドラが1570年7月21日にパリで誕生したシャム双生児を題材に二篇のラテン語詩をものしたことを想起すべきだろうか<sup>(21)</sup>。どんなに怪異であろうと、それが生物の力学に属しているからには、それを説明することが肝要なのだ。事の真偽を区別するのではなく、怪異の発現をできるだけ蒐集したうえで説明を加えること。ユマニストの関心はこの点に集中した。そのとき情報の信憑性とか情報源の検証よりも、資料の豊富さが大切になってくる。たとえば、高名な外科医アンブロワーズ・パレの『怪物と驚異について』(1573)を開くと、素材の莫大さに度胆を抜かされる。そのレパトリーは確かな観察によるものから間接的な証言にまで及び、信憑性を議論しないままに怪物のさまざまをかたはしから記録していく。ユマニストは前節で見た古典古代からの百科全書的な伝統を摂取しているのである。科学といってもこんな折衷主義的な科学である。ユマニストが怪物に特別な位置を提供したからといって、どうして驚くことがあろうか。

かくて16世紀では、畸形は自然科学にも属するし、宗教にも属するので

---

(21) Cf. D. Wilson and A. Moss, «Portents, prophecy and poetry in Dorat's *Androgyn* poem of 1570», in *Neo-Latin and the Vernacular in Renaissance France*, edited by G. Castor and T. Cave, Oxford, Clarendon Press, 1984, pp. 156-173.

ある。畸形は「ここではない」、別の世界から送られたメッセージである。それが自然の多様性を担っているがゆえに歓喜と賛嘆を呼びさまそうが、あるいは不吉な意味を担っているがゆえに人々を不安のどん底に沈めようが、ともかく畸形は解釈を前提としていた。

前節でも述べたように、アウグスティヌス——それにプリニウスを加えてもよい——に遡る伝統というものがある。怪異は自然の秩序を脅かすどころか、自然の讃仰すべき多様性を証すもの、との見方である。世界は大きな書物——「自然という書物」*liber naturae*——であり、神はそこに無限の創造性の証左を書きつけ、人間の目に惜しげもなくそれを晒すのである。そのとき畸形は賛嘆の念と好奇心を鼓舞するはずだ。畸形は既知の境界を拡大する。人知の狭小な限界を超えた、生の可能な限りの形態を包含した宇宙、この止むことなく懐胎する宇宙を私たちが讃えるように誘うのである。ユマニストが無数の驚異・怪異を蒐集して、著作に取り込んだのも、神の徴の无尽蔵の宝庫を手中にするためではなかったか。資料としてよりも、まず宗教的昂揚があった。畸形——たとえば「坊主仔牛」にせよ、一本足の怪物にせよ——が本物なのかどうかを決するのが問題なのでなく、その可能性を慎ましく受け容れることこそが問題なのである。なぜなら、創造の驚異がどこで止むのか、神を措いて誰にも知りえようがないからだ。シャム双生児を前にしたモンテーニュが「議論は医者にまかせる」と下駄をあずけて判断停止を選んだのも、理性の限界を知っているからではないのか。

われわれが奇怪と呼ぶものは神にとってはそうではない。神はその広大無辺の御業の中に、そこにお入れになった無限の形態を見ておられる。いまわれわれをびっくりさせたこの畸形児も、人間の知らない何か別の同じ種類のものに類似しているとも考えられる。神の全知全能からは善良なもの、普通なもの、規則的なもの以外には何も出てこない。ただ、われわれにはそこにある調和と関連が見えないだけである（『エッセー』第2巻第30章）<sup>(22)</sup>。

何がありえて、何がありえないか、また何が異常で、何が正常か。己の無

(22) Montaigne, *op. cit.*, p. 713 (モンテーニュ『エッセー』(II), 原二郎訳, 筑摩書房, 1962, 81頁).



知をも省みずにそれを峻別しようとするのは傲岸以外のなにものでもない。神を人間の次元にまで引き下げることにはほかならないから。

しかし、これまた前節で示したように、怪異は神の意志の記号でもあって、人間に恐怖や反感を招くものであった。畸形は神が発する威嚇のメッセージかもしれず、人間が犯す道徳的罪の化身として送り出され、その罪の悲惨を映し出す鏡像であったり、災禍を予告したりした。天変地異とかペストがときに神の懲罰と見なされたごとく、畸形の誕生もまた同じ不吉な前兆と見られたのである。そればかりでない。場合によっては、悪魔が人間どうしの間には不和の種をまくように、畸形がサタンの放つ間諜として人間社会の安寧を脅かす超自然的な力と見なされることすらあったのである<sup>(23)</sup>。

大部分の16世紀人にとって、怪物とはこの二面性の間を、境界線は必ずしもはっきりせぬままに揺れ動く存在であった。

---

<sup>23)</sup> *Les Songes drolatiques de Pantagruel*, La Chaux-de-Fonds, Editions [vwa], 1989の劈頭を飾るミシェル・ジャヌレによる「序文」（とくに pp. XXVII-XXVIII）に多くを負っている。